



写真提供：(公財)野口英世記念会

横浜市 長浜ホール「野口英世博士への手紙コンテスト」原稿用紙

併校名

西ノノ学園

6

年

組名前

和山翔龍

今僕には21世紀から博士に手紙を書いていま
 す。博士の業績は、だれでも知っています。が
 僕の心に残っている事は、黄熱病の事です。横
 浜の長浜検疫所には、博士の記念館があり、研
 究道具が展示されています。そこで博士が使っ
 ていた種類の顕微鏡を見ました。これは、光
 学顕微鏡という物で、ウイルスを見る事が出
 来ない。そこで、博士の残念な顔が想像できま
 す。現在では、フイルムを見る事が出来る電子
 顕微鏡があり、今流行のコロナウイルスも見
 る事ができます。博士ならこのウイルスを
 研究して、正しい治療方法を見つけてくれると
 信じています。

僕が博士についてすごいのと思っ
 たところは、貧農出身だけど、医学の道へ進み、
 博士になったこと、たまたま、
 たまたま、幼い時に大火傷を負ったこと、
 や医学と語学を両立して学んで来たこと、
 銘を受けました。僕が困難におちいた時は、
 博士を思い出して、その状況から抜けました。
 と思います。野口英世博士、お元気で。